

十勝の金融経済概況

1. 全体感

十勝の景気は、東日本大震災の影響による下押し圧力が和らぐ中で、持ち直しつつある。

最終需要面をみると、公共投資、住宅投資は弱めの動きとなっている。一方で、個人消費は、震災の影響による落ち込みの後、持ち直しつつあるほか、設備投資も、弱めの動きにあるものの、一部に持ち直しの動きがみられる。生産面でも、震災の影響が和らぐ中で、電気機械、食料品製造業等で、生産水準を引き上げつつある。

この間、雇用情勢は改善基調にあるが、企業倒産は増加した。

2. 最終需要の動向

(設備投資)

設備投資は、弱めの動きにあるものの、一部に持ち直しの動きがみられる。

(個人消費<含む観光>)

主要小売店の売上高(5月、10社)は、天候不順の影響から衣料品等が伸び悩んだため、全体ではほぼ前年並みに止まった。

耐久消費財の売行きをみると、家電販売が、地上デジタル放送移行を間近に控え、テレビやレコーダーの買換え需要などから、堅調な動きとなっている。また、乗用車新車登録届出台数(6月)は、震災後の供給制約の緩和から持ち直した。

震災の影響から大きく落ち込んだ旅行・観光関連では、道内客が修学旅行生の受け入れも加わって持ち直しているほか、道外や海外客にも下げ止まり感が窺われており、とち帯広空港の乗降客数(6月)や、十勝川温泉の宿泊客数(5月、4社)は、減少幅が縮小した。この間、市内ホテルの宿泊客数(5月、8社)は、ビジネス客中心に堅調であったことなどから、引き続き前年を上回った。

(住宅投資)

新設住宅着工戸数(5月)は、前年を下回った。

(公共投資)

公共工事請負金額(6月)は、2か月振りに前年を下回り、基調として弱めの動きとなっている。

3. 生産・雇用・企業倒産の動向

(農業・食料品)

生乳生産量(5月)は、乳牛の体力低下や種付けの遅れから、前年水準を若干下回った。乳製品生産量(5月)は、原料である生乳の道外移出増等の影響から、引き続き前年を下回った。

農作物の生育状況(7月1日現在)は、6月に気温と日照時間が平年を上回る日が続いたことから、気温の低かった5月と比較して回復し、総じて順調に推移している。

(木材)

製材品の生産量(5月)は、カラマツ材で自動車メーカーの生産回復に伴う梱包用材向け需要に動意がみられるものの、建築用材の需要が弱いことから、全体では前年を下回った。

(電力消費)

電力消費量(5月、除く電灯)は、前年水準を下回ったが、電気機械、食料品製造業等で増加している。

(労働需給)

求職・求人状況(5月、常用)をみると、有効求人数の伸びが、有効求職者数の伸びを上回った結果、有効求人倍率は0.48倍と前年同月(0.45倍)を21か月連続して上回った(+0.03ポイント)。

もっとも、新規求人数が、パートで大きく減少したため、全体でも23か月振りに、前年を下回った。

(企業倒産)

企業倒産(6月、負債額10百万円以上)は、件数2件、負債総額57百万円となり、件数では前年(1件<負債額210百万円>)を上回った。

4. 金融情勢

(預金動向)

帯広市内金融機関の実質預金残高（5月末）は、個人向け国債償還金の流動性預金への歩留まりを主因に、引き続き前年を上回った。

(貸出動向)

貸出残高（5月末）は、法人向けが低調なため、ほぼ前年並みの水準に止まった。

この間、貸出約定平均金利（5月末、総合）は、信金がほぼ前年並みながら、銀行が上昇した。

(銀行券)

銀行券の動き（6月中）をみると、発行額はほぼ前年並みの水準であったが、還収額は前年を上回ったことから、発行超額は21億円と前年（28億円）を下回った。

以 上